にこり ながさき

ようこそ、笑顔咲く長崎県へ

Nagasaki Discovery Magazine ni-ko-ri

長崎県

佐々町

神降る山のふもとで
受け継がれるこころ

Saza Town

No. 17

佐々町

神降る山のふもとで、受け継がれるこころ

眠っていた歴史がいま目を覚ます。

長崎県の北部、佐世保市に隣接する佐々町。高台からまちを見下ろすと、中央を清流が走っている。県北の最高峰国見山に源流を発する佐々川は、緩やかな孤を描きながら九十九島の海へとつながり、その向こうには、はるか五島列島が浮かんでいる。

長崎県内に暮らす人でも佐々町に降り立ち、ゆっくりと散策したことのある人は少ないのではないだろうか。正直、「平戸へ行く通り道」だと思っている人もいるかもしれない。しかし、平成二十三年に西九州自動車道が佐々インターチェンジまで開通し、アクセスが向上してからというもの、これまであまり知られていなかったまちの魅力が徐々に明らかになってきた。最近では、県外からパワースポットめぐりに訪れる人も多いという。

皆が通り過ぎてきたまちだからこそ、観光地化されることなく、そこに暮らす人々がつないできたものがしっかりと残っている。佐々は、そんなまちだ。だからどこを歩いてもタイムトリップしたような懐かしさを覚える。そして、受け継がれてきたものの価値を知ることができる。

さぁ、出かけよう。佐々をめぐる時間旅行へ。

佐々町農業体験施設からの眺望。晴れた日の眺めは実晴らしい。

古川岳遊歩道を往く

パワースポット① Saza Power Spot

まちの西にそそり立つ連峰「古川岳」は佐々のシンボルである。古くから神が降りる山と信じられ「降神岳」とも呼ばれてきたこの山には、平安時代、頂上に神殿が設けられ、「山尊大明神」が祀られていたという歴史がある。とても険しい山々だが、現在は全長三・三キロメートルの遊歩道が整備されており、散策を楽しむことができる。

今回挑戦したのは、真竹谷側から登る初心者向けのコース。郷土史家の腦由典さんに案内していただいた。初心者向けといっても、登山口から二百七十一段の階段を上ると、さらに急カーブの階段が待ち受けるという、運動不足の体には少々きつい道のりだ。しかし腦さんは「この遊歩道ができる前はここを上ってきていたんですよ」と、道なき道を指さす。なんでも古川岳には谷ごとに道（のようなもの）があり、村人たちはその険しい山道を上ってお参りに来ていたという。

やっとの思いで階段を上りつめ、展望所にたどり着いた。眼下には佐々のまち並みが広がり、それを見守るように菩薩様が立っていた。これは、昭和八年に村の有志たちが寄進したものらしく、遊歩道には十体の観音像や菩薩像が祀られているという。

まちを見下ろしながら、腦さんが佐々の歴史を語りはじめる。「私は佐々の歴史の中でも特に室町時代に興味があります。室町時代は、それまでさげすまれていた人々が世に出はじめ、日本中が沸き立っていた時代です。時とともに平戸の勢力が大きくなり、佐々は取り込まれていくのですが、もともと佐々を領有していた佐々氏も最初は農民だったのではないかと思うんです。私は自らの領土を自分たちの手で守ろうと決意したこの時代の佐々の歴史が好きですね」。

展望台を後にし、隣の峰である三尊岳へと向かった。古川岳はとにかくアップダウンが激しい。上ったかと思えば下り、下りきったかと思えばまた上る。

「ここから上が三尊岳ですよ」と腦さん。見ると、これまた道なき道である。とても上ることはできそうもないが、山尊大明神が祀られたのは九百七十七年。その後、三百五十八年もの間、この場所にお宮があったというから驚く。突然、強い風が吹いた。「この場所は昔から風が吹き抜けるんです。子どもの頃は、夏になるとここでよく涼んでいました」。腦さんの幼い頃を懐かしむ声が風に乗って消えていった。

私たちの知らないところで菩薩様はいつも祈ってくださっている。

展望所の菩薩様。展望所からは佐々のまち並みが一望でき、とても気持ちがいい。菩薩様の優しいお顔に癒される。

写真左／展望所までの道のりは急な階段が続く。澄んだ空気を胸いっぱいに吸い込んだ。 中／崖の上に立つ菩薩様は美しい棚田も見守っていた。右／下から見上げた古川岳。起伏が激しいのが分かる。

パワースポット①
Sasa Power Spot

山の中で海に出会う

目の前に現れた神秘の風景。そこは言葉のいらない世界

二尊岳の崖下を進むと、むき出しの巨岩や岩壁が続いている。その迫力に圧倒されながらも、ある衝撃的なことに気付いた。波に洗われたなめらかな岩肌と浸食の跡……ここにある岩は海にある砂岩そのものではないかと。「そうなんですよ。ここは昔、海だったんです。この巨岩は佐々川の川底から地下八百メートル下のものと同じ地層なんですよ」。巨岩には丸い小石だけではなく、貝殻までも付いている。

山の上に海の風景が広がっている——昔の人々はさぞ不思議に思ったに違いない。平安時代、この巨岩のすぐ下には海が広がっていたという。今のように岩をさえぎる木々もなかったというから、下から見上げるとそそり立つ不思議な巨岩はさぞ神々しく見えたことだろう。なぜこの場所にお宮があるのか、ようやく理解できたような気がする。

数十メートルおきに祀られている仏像。そして、その重い仏像を担いできた村人たち。彼らの厚い信仰心とはいかばかりだっただろう。「山を上るのは辛いことですが、その苦しさがお参りしているという実感につながるのかもしれません。今でも毎月、上る人がいらっしゃいますよ」。脚さんの言葉に何度も頷いた。

地上二百メートルの山の上で見る海の景色は神秘的で、ご利益を求めるというよりも、畏敬の念を抱いた。菩薩様のお顔に木漏れ日が降り注ぐ。そっと手を合わせた。

佐々は魅力的なまち。ぜひ遊びにきてください。

「佐々の生き字引」といわれるほど、佐々の歴史に詳しい脚さん。「学びを深めると、ひとつひとつの歴史がつながっていきます。点と点が線でつながったとき歴史の楽しさを実感しますね」と歴史への思いを語る。

郷土史家 脚由典さん

パワースポット② Saza Power Spot

三柱神社

力感あふれる筆はこびに絵師たちの息づかいまでもが聞こえてくる。

天井絵

平安時代に三尊岳に祀られたお宮は、参詣に不便であることからふもとへと遷座された。その後、時代とともに遷座を繰り返し、一八〇五年、現在の場所へと移された。一八七一年には「三柱神社」と改称。三柱とは素戔嗚命、大己貴命、稲田姫命である。

素戔嗚命と稲田姫命がご祭神とあって、戦勝や縁結びを願って参詣に訪れる人も多いが、このお宮でぜひ見ておきたいのが、明治時代に地元の絵師が描いたという八十一枚の天井絵である。美しい草花や動物たちをはじめ、佐々川に浮かぶ帆掛け船や、佐々川でとれるはまぐりなど、地元ならではの風物が見られる。また、この天井絵は三人の絵師の合作によるため、それぞれの絵のタッチが異なる。写実的な花もあればコミカルな獣もあり、実に微笑ましい。

天井絵のすぐそばには、享保年間（一七一六～一七三五）作の絵馬も飾られている。絵馬というと、今では願い事を書く小さな板を思い浮かべるが、祈願や報謝のために画家が筆をふるう小絵馬や大絵馬と呼ばれるものがあるという。こちらの絵馬は、ヤマタノオロチの伝説をモチーフにしたもの。酒を飲んでいるヤマタノオロチの前で、猛々しい顔をした素戔嗚命が討ち取る機会を伺っている。その奥で心配そうに見守っているのは稲田姫命だろうか。江戸時代に描かれたものとは思えないほどの鮮やかさ、美しい色彩に目を奪われた。佐々で最も古い絵馬である。

平安時代には山の頂上まで行かなければお参りできなかった神社も、今では車でも参詣できるとあって、地元の人にとって初詣や七五三のお参りに訪れる身近な神社となった。それでも人々が祈る気持ちは同じ。そこには千年の時を経ても変わらぬ心があった。

三柱神社
佐々町羽須和免404
TEL 0956・62・2416

絵馬

医王山 東光寺 伝育坊の武器

パワースポット③ Saza Power Spot

伝育坊が使ったとされる2本の武器は大切に保管されていた。あい部分は逆が当てられている。

医王山東光寺の創建は一四三六年。土佐の国の松陰禅師が東光寺の裏山にあった虎頭岩に霊力を感じ、この地で坐禅を組んだことがはじまりといわれている。

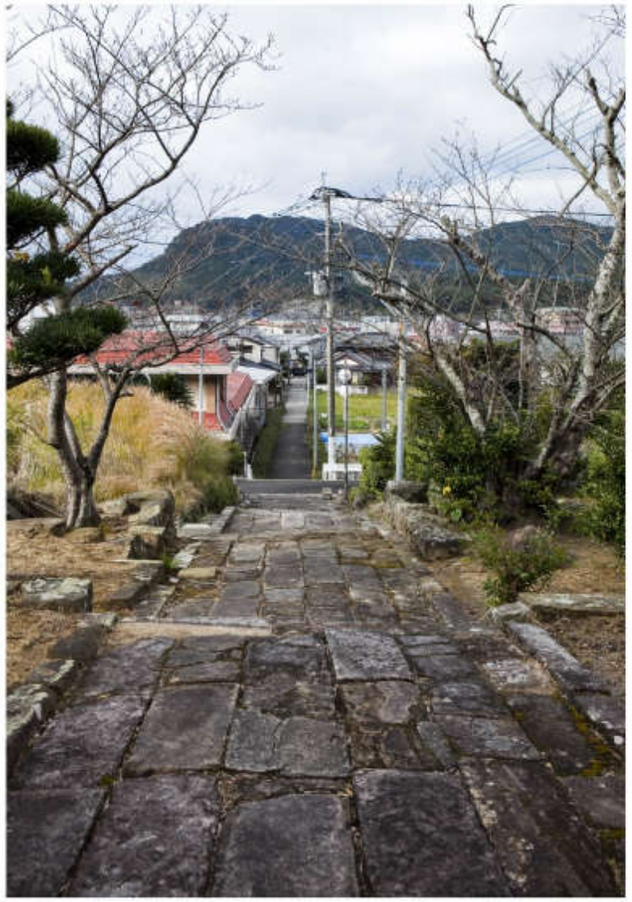
その後、この地には平戸松浦氏と宗家松浦氏の戦いに際して、出城が築かれた。佐々は平戸松浦氏の最前線基地だったのである。両者の戦いは結局、宗家松浦氏が平戸松浦氏の三男を養子に入れて講和を結ぶ形で集結。腦さんは言う。「佐々の歴史をみていくと、領主を討ち取る戦はなく、養子でつないでいくんですよ。穏やかといえば穏やかですよね」。

東光寺には、この戦いで敵を次から次へとなぎ倒し、大活躍した伝育坊という大男の伝説がある。それを裏付けるように、寺には伝育坊が使ったとされる武器が伝わっていた。長さは二メートル以上、かなりの重量だ。これを軽々と振り回していたとすると、よほどの大男だったに違いない。

東光寺にはまだ伝説がある。こちらの本尊「瑠璃光薬師如来」は一五〇〇年に、松浦弘定より寄進されたものだが、その子興信が京都での戦いに際し、陣中に本尊を迎え祈願したところ連戦連勝したという。そのご利益にあやかったのだろう、松浦鎮信父子は一五九二年の朝鮮出兵時に、なんと本尊を朝鮮まで持参したという。約三千の兵を率いて出陣した鎮信父子は軍功抜群で帰国。瑠璃光薬師如来像は、実に七年ものあいだ朝鮮各地を転戦したのである。その後、本尊は無事に戻り、今も大切に祀られている。連戦連勝の神様は今や受験生の強い味方である。

東光寺の山門から見下ろすと、細い道が通っているのが分かる。昔の平戸街道だ。腦さんは「伊能忠敬も吉田松陰も、この道を通って平戸へと向かいました。ここは平戸松浦家の寺ですから、参勤交代のときは藩主たちもここでお参りをしたと思います」と話す。当時をしのばせる狭い道幅。吉田松陰は日没までにその日の宿泊地である江迎に着こうと、この道を急いで駆け抜けたという。

石畳の階段 その先にはいくつもの伝説が眠る寺がある。



東光寺の参道の石畳。この階段を下りたところに平戸街道が通っている。春は桜が美しい。

医王山東光寺
佐々町羽須和免533
TEL.0956-63-2043

栗まんじゅう

大吉まんじゅう

佐々を歩けば縁起菓子に当たる。

佐々にはパワースポットと同じくらい縁起のいいお菓子が多い。「御菓子處 叶家末廣」で出会ったのは、その名も「大吉まんじゅう」。「大吉」の焼き印が押された一口サイズのまんじゅうは、あんが皮から飛び出そうなくらいたっぷりと入っている。考案者のご主人は「おみくじで大吉をひくと嬉しいですよね。そういう気持ちになるような饅頭を作りたかったんです」と笑顔で話す。丹念に炊き上げたあんは、完成に半年もの時間を費やしたというご主人の自信作だ。こちらの店には、清峰高校の甲子園初出場を祝って創作された「清峰萬壽」も。このお菓子を作った四年後に春の大会で優勝したこともあって、縁起がいいと評判だ。そのほか二、三日天日干しして作る「昔ようかん」など懐かしいお菓子が並ぶ。

「栗饅頭本舗 小田製菓」の看板商品は、焼き色がきれいな「栗まんじゅう」である。バター風味の生地の中には黄味あんと栗が丸ごと一個！ 思わず頬がゆるんでしまう。佐々川、佐々太鼓、若あゆ……と、佐々らしい名前のお菓子が並ぶのもこの店ならでは。お土産にもピッタリだ。

菓子を作る上で大事にしていることを尋ねると、店主の小田稔さんは「きちんと作ること」だと教えてくれた。それはつまり手を抜かない、当たり前のことを当たり前にすること。親子二代で菓子づくりに励んできた店主の言葉は、シンプルがゆえに重い。ひとつひとつの菓子には、ひとつひとつの願いがきちんと込められている。

御菓子處 叶家末廣
佐々町羽須和免872
TEL.0956-62-3227

栗饅頭本舗 小田製菓
佐々町市場免3-4
TEL.0956-62-2522

まちの中央を緩やかに流れる佐々川。県北一の長さを誇るこの川は、歩いてみるとその良さがよく分かる。幅が狭くなったり広くなったりと様々に表情を変えるその姿は、キラキラと光って美しい。水面には山々の緑が映り、川と平行して松浦鉄道の列車がのんびりと行き過ぎる。下流にはサイクリングロードが整備され、春には二キロメートルに渡って河津桜が咲き誇るという。

四季の恵みも豊かだ。二月から三月にかけてはシロウオ漁がはじまり、六月にはアユ釣りが解禁となる。そして秋にはモクズガニを捕る人やうなぎ塚漁をする人たちの姿が見られる。エサが豊富な上流から下ってくるうなぎは、腕のように太いらしい。

川を眺めながら、腦さんが話しはじめた。「佐々川に架かる橋のうち、佐々町内には九本の橋が架かっていますが、一番古い橋は明治三十年にできたもの。それまでは藩の政策で、敵から攻められないように橋は架けてなかったんです。この問も地元のおばあちゃんから『自分が小さい頃は、小学校の先生が袴の裾を持ち上げて飛び石を渡っていた』という話を聞きました。昔は川沿いに茶屋や遊郭もあったそうです。タイムマシーンがあるなら、昔の佐々を見てみたいですね」と腦さんは目を細めた。

佐々の人々は、どの時代にあっても、ずっと佐々川とともに生きてきた。その恵みだけでなく、時には氾濫という不幸をも受け入れてきたに違いない。そして、彼らはこれからも川とともに生きていくのだろう。冬、佐々川はたくさんの渡り鳥たちで賑やかになる。

佐々川

このまちでは
川と人は一心同体。
どちらも実に美しい。

地域特集 佐々町 Saza Town

恵みの歳時記

黄金色の香り高い

長崎釜いり茶

和喫茶 息福
佐々町本田原免234-2
TEL.0956-63-2712

お茶が日本にもたらされたのは、十二世紀末。臨済宗の開祖である栄西禅師が中国から持ち帰ったお茶の種子を、平戸の地に蒔いたのがはじまりといわれている。庶民がお茶を楽しむようになったのは、それから約四百五十年後。隠元禅師が長崎で釜炒り茶の製法技術を伝えたことから、各地に広まったという。現在一般に広く飲まれているお茶は、製法の近代化とともに生まれた蒸し茶で、隠元禅師が伝えた昔ながらの釜炒り茶にお目にかかることはめったにない。

佐々駅のそばで「長崎釜いり茶」の看板を掲げた「和喫茶息福」に出会った。こちらの店内では日本茶を楽しむことができ、メニューには「釜いり茶」の文字がある。色は緑というよりも、黄金色。香ばしくて、スーッと飲みやすい。店長の上ノ原美佳子さんは「お茶ばなれが進んでいる今、茶葉を買っても家で美味しく入れられない人が多いんです。だから、ここでゆっくりお茶の美味しさを知ってほしいですね」と話す。しかし、店で出されるお茶にはどうしても「無料」というイメージがある。美味なるコーヒーと同じように、美味なるお茶にも価値があるのではないか。果たして三百円のお金を払ってお茶を飲んでくれる人がいるのか……出店にはそんな挑戦の意味もあったという。

こちらは釜炒り茶の提供、販売だけではない。美佳子さん一家は製茶園を営み、長崎県で唯一、釜炒り茶を作り続けている。そこで山深い場所にあるという工場へと向かった。

黄金色に輝く「長崎釜いり茶」のパッケージ。

守り抜かれた
黄金色のお茶をいただく。

「和喫茶 息福」では専用の茶器で長崎釜いり茶をいただく。家庭で飲むお茶とは、ひと味もふた味も違う。

地域特集 佐々町 Sasa Town

写真上／「お茶の美味しさだけではなく、歴史や文化も伝えていきたい」と宏二さん。
中／関西から嫁いできた美佳子さんは「佐々は食べ物が美味しいし、緑もたくさんある。子育てにはいい環境です」と話す。
下／ともに歩んできた機械を愛おしそうに眺める時男さん。

「上ノ原製茶園」を営むのは、美佳子さんとご主人の宏二さん、そして宏二さんの父親の時男さんである。製茶園は、時男さんのお父様が終戦直後にはじめたという。その頃はどこの茶園も釜炒り茶を作っていたというが、今はみな大量に生産ができる蒸し茶に切り替え、釜炒り茶を作っているのは県内でもここだけとなった。

釜炒り茶の特徴はなんといっても、その香ばしさとすっきりとした喉ごし。「お酒に例えると、蒸し茶は日本酒、釜炒り茶はビール。ビールなら何杯でもゴクゴク飲めるでしょう」と時男さんは笑う。

工場には三台の鉄釜があった。「大きい釜だと量はたくさんできるんですが、うちは美味しいお茶を作るために、熱効率がいい小さい釜を使っています」。四十年以上使っている釜は故障もしばしば。時男さんは何度も何度も自分の手で修理をしながら大事に使ってきた。

「蒸し茶の機械はコンピュータ制御できるんですが、釜炒り茶の場合は、釜の温度や炒る時間に職人の勘が必要になります。同じ年に収穫したものでも畑がどちらの方角を向いているかで茶葉の質は異なります。茶葉が違えば釜の温度も炒る時間も変わってくるんです」。

その茶葉を育てるのも簡単ではない。宏二さんは「お茶の木が今何を欲しがっているかを知ること、お茶と会話ができるかどうかにかかっています」と話す。

時男さんは二十歳、宏二さんは十八歳でこの世界に飛び込んだ。二人は初代の味を守るというよりも、切磋琢磨しながら「上ノ原製茶園の味」を作ってきた。「蒸し茶に切り替えようとは思わなかったのか」という問いに、時男さんは「うちのお茶を買ってくださる方がいたからね」と目を細めた。

「お茶には栄西から始まる長い歴史があります。自分はその歴史の一端を担っているだけ」と話す宏二さん。先人たちが広めたお茶の文化は日本全国へ広まり、その技術は父から子へと確かに受け継がれている。息子が父から学んだ最も大切なことは「コツコツ」だという。

釜には時男さんの手による「うまい茶 釜炒り」の文字。

上ノ原製茶園
佐々町八口免1-11　TEL.0956-63-2712
上ノ原製茶園　検索

語りかける風景 11

ほっこり焼きいもタイム

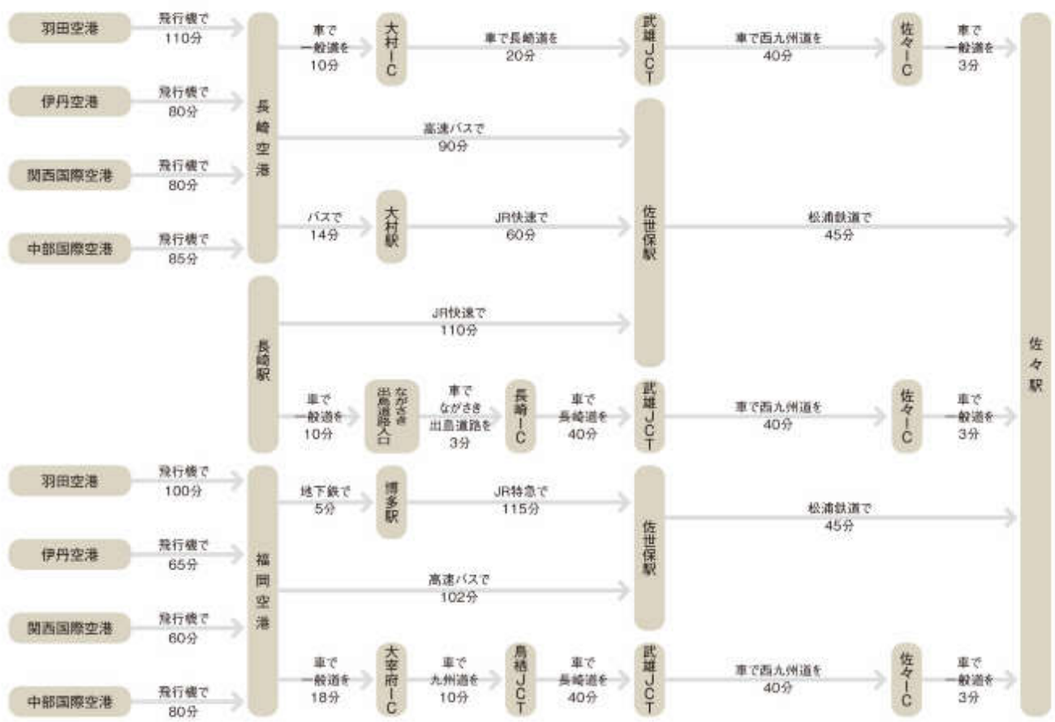
古川岳の展望台に着くと、同行してくださった役場の方から「どうぞ」と焼きいもをいただいた。皆で佐々のまちを眺めながら、ホクホクの焼きいもを頬張る。

しばしの休憩は、腊さんとのおしゃべりタイム。腊さんは百七年続く金物屋の三代目だそうで、八年ほど前から佐々の歴史を本格的に勉強しはじめたという。豊富な知識と記憶力には圧倒されっぱなしだったが、「でも郷土史家が一番短いんですよ」と腊さん。なんでも弓道歴五十年、アユ釣り歴は四十年だそうで、アユ釣りに関しては佐々川では珍しい友釣りという方法の名人だとか。いくつもの顔を持つ腊さんだが、共通しているのは、何かを始めたら極めずにはいられないこと。そして、穏やかで温かいこと。こんな方が一人でもいれば、まちは安泰だとしみじみ思った。

佐々の美景と、あまい焼きいもと、腊さん。三点セットでお腹はいっぱい。なんとも幸せなひとときであった。さすがは、神様の降る山である。

これから先、
焼きいもを食べるたびに
思い出すのは、佐々のこと。

佐々町へのアクセス



本県出身
松尾敏男氏に文化勲章

朝光のヴェネツィア（2007年）

本県出身の日本画家・松尾敏男氏に今年度の文化勲章が贈られました。

松尾氏は大正15年長崎市に生まれ、3才まで長崎に居住。昭和24年に第34回再興院展で初入選を果たして以来、日本美術院を中心として多くの日本画の傑作を発表し続け、我が国の芸術文化の振興に大きく貢献されました。

また、優れた作品を本県に数多く寄贈されたほか、回顧展が開催されるなど、本県の芸術文化の発展にも多大なるご尽力をいただきました。

長崎県美術館では、今回の受章を祝し、所蔵する作品を紹介するコレクション展を開催中です。繊細かつ情緒にあふれた松尾芸術の世界にぜひ、触れてください。

松尾敏男氏

略歴

- ●大正15年／長崎市今籠町（現・銀冶屋町）に生まれる
- ●昭和18年／日本画家 堅山南風に入門
- ●昭和24年／第34回再興院展に〈埴輪〉が初入選
- ●昭和45年／第55回再興院展にて〈樹海〉が日本美術院賞、大観賞を受賞
- ●昭和54年／〈サルナート想〉により昭和53年度日本藝術院賞受賞
- ●平成12年／文化功労者顕彰
- ●平成21年／日本美術院理事長に就任
- ●平成24年／文化勲章受章

長崎県美術館コレクション展

文化勲章受章記念　松尾敏男展

会　期　3月10日（日）まで

入場料｜一般 400（320）円、大学生・70歳以上 300（240）円、小中高生 200（160）円
※県内在住の小中学生無料、（　）内は15名以上の団体料金

休館日｜毎月第2・第4月曜日（祝日の場合は翌日）　12月29日～1月1日

問い合わせ先｜長崎県美術館（長崎市出島町）　TEL.095-833-2110

長崎県美術館　検索

島碑（1968年）

夜想譜（1990年）

TOPICS
トピックス

V（ヴィ）・ファーレン長崎J2へ昇格!!
～8年目の悲願達成～

JFL優勝を決め歓喜に沸く選手たち

長崎から待望のJリーグチームが誕生しました!! 地元長崎のプロサッカークラブV・ファーレン長崎がJFL（日本フットボールリーグ）で初優勝し、悲願のJリーグ昇格が決定。チーム発足から8年目、数々の苦難を乗り越えた末の吉報に多くの県民、サポーターから歓喜の声が上がりました。

「ファーレン」とは航海を意味するオランダ語。今年3月からは、2万人収容の県立総合運動公園陸上競技場（諫早市）を新本拠地として、V・ファーレン長崎の新たな航海が始まります。これからも長崎県内外から多くの皆さんの応援をお願いします。

新本拠地となる陸上競技場（完成予想図）

V・ファーレン長崎 J昇格へのあゆみ

2005年3月	◎V・ファーレン長崎誕生　九州リーグ3位
2006年	◎九州リーグ1位
	◎全国地域リーグ決勝大会に進出するも決勝ラウンドで敗れる
	◎全国社会人サッカー選手権大会優勝
2007年	◎九州リーグ3位
2008年	◎九州リーグ2位
	◎全国地域リーグ決勝大会準優勝
	JFL昇格
2009年	◎JFL11位
2010年	◎JFL5位
2011年	◎JFL5位
2012年	◎JFL1位
	Jリーグ昇格決定

内閣総理大臣賞受賞

～第10回全国和牛能力共進会　肉牛の部～

平成24年10月に開催された和牛のオリンピックと称される全国和牛能力共進会において、長崎県代表牛が、肉牛の部で日本一となる内閣総理大臣賞を受賞。また、全国で唯一、全出品牛が優等賞を受賞するという高い評価を受けました。長崎県の恵まれた自然環境の中、塩分やミネラルが豊富な牧草を食べ、1頭1頭が愛情を込めて育てられた日本一の「長崎和牛」を是非ご賞味下さい。

長崎県

長崎県農林部畜産課　長崎市江戸町2-13　TEL.095-895-2953　FAX.095-895-2593

にこり

表紙のはなし　民吉（たみきち）もなか

江戸時代、今の愛知県瀬戸市に生まれた加藤民吉は佐々町で磁器の製法を修行し、今の瀬戸焼きをもたらした人物。民吉もなかはそんな民吉の作品をモチーフに作ったお菓子です。町内の菓子店で製造・販売していましたが、昨年12月に営業を終了し現在は販売されていません。

平成25年1月発行
編集・発行／長崎県広報課　〒850-8570　長崎市江戸町2-13
電話095-895-2021　メール:ni-ko-ri@pref.nagasaki.lg.jp
デザイン／(有)イーズワークス　印刷／(株)インテックス
http://www.pref.nagasaki.jp/koho/plaza/dream/　長崎県

定期購読（無料）の申込はこちらから →

この印刷物は古紙配合率70%以上の再生紙を使用しています。R70